嘉庫　嘉悦大学学術リポジトリ　Kaetsu University Academic Repository

英語受動構文の研究 ： 認知言語学的視点から

著者名(日)	高野 秀之
雑誌名	嘉悦大学研究論集
巻	46
号	2
ページ	53-80
発行年	2004-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1269/00000102/

英語受動構文の研究

－認知言語学的視点から－

A Cognitive Approach to the Passive Constructions

高野　秀之
Hideyuki Takano

<要　旨>

This paper investigates the mechanism of a typical passive construction (namely, "be + past participle") in the language system of English from the view point of cognitive linguistics. Cognitive linguistics has an important principle; that, "Different forms have different meanings". Therefore, we can be sure that there is something different within the grammatical exchange for active and passive constructions. Normally, however, few students of EFL in Japan understand the relatively delicate gap between these two constructions. This is partly because they have never received a linguistic explanation about the system of the English language. Also, this is simply because teachers have never found it necessary to refer to the gap. However, I would claim, this is because there are few people who know that our construal tends to reflect on our language use by means of our choice in the cognitive process.

A cognitive linguistic approach can explain why we choose a passive construction even when the event itself is active. Also, this approach can point out for us that there are some differences in the process of exchange between the passive and active voice in the pragmatic context, even if both constructions describe the same event. For example, the sentence structure is changed from active to passive when we interpret that the actor of the event is not as significant as the target of the action. Also, the grammatical subject of a passive construction doesn't consist of an agent (or, an actor) in the semantic structure of English.

Passive construction is also explored from linguistic typological perspectives. In that section, passive constructions of English are systematically examined referring to the Japanese language. The comparative analysis will help us to discover how we can properly make use of the difference between the passive and active voice in English.

<キーワード>

受動構文（passive construction）、認知言語学（cognitive linguistics）、捉え方（construe）、認知のプロセス（cognitive process）、焦点化（profiling）、図と場（figure and ground）

Ⅰ．序文

本稿は、認知言語学的な視点から「英語の受け身」を捉えなおすことにより、言語使用レベルにおける受動構文のしくみを解明しようとするものである。

全体として本稿は三部構成になっており、伝統的な文法観と認知言語学的視点とが対立する部分に焦点をあてた**歴史的背景**から始まる。そこでは、いわゆる学校文法で繰り返される文法レベルの書き換え操作に注目し、受動構文の前提となる能動文を概念的に捉えなおし、学習者が変形操作を中心とした教授法から何を、どれだけ理解しているのかを考察する。学校文法における受動構文は、概して「be 動詞＋過去分詞＋ by ～」という統語配列規則を理解させることを目的としており、他動詞構文に突然 be 動詞が現れることに対して何ら説明を加えていない。その一方で、一般動詞の不規則な形態変化を暗唱させ、それを正しく綴らせることにかなりの時間を注ぐ傾向にある[1)]。残念なことに、そこでは「受動構文は、なぜ be 動詞と過去分詞とを要請するのか」という言語使用上の根源的な理由が説明されていない。過去分詞について言えば、他者からの働きかけ（即ち、「外的な要因」）によって何らかの変化がもたらされたことを示す機能（即ち、「受動的な状態を表す形容詞」としての機能）を含意しているということが別項目として取り上げられている[2)]。そのため、過去分詞と受動構文との関連づけが明確に示されていない。教科教授法の指導者が体系的に言語を捉えて、実際に現場で指導する教員が積極的により多くの言語データに触れる努力をすれば、学習者は受動構文を少なくとも今より正確に理解できるようになるであろう。

伝統的に受け継がれてきた教授法の修正に続き、いつも受動構文と対をなすように考えられている能動文に着目する。能動文の理解を更に深めることを目的として、近年の国語（日本語）教授法にはほとんど見られなくなった「格文法」に言及する。学習者は文構成要素（例えば、語や句）の配列変換に形態変化が義務付けられるということを認識している。しかし、統語配列規則（文法）は文の各構成要素の持つ「意味役割」とは別次元のものであり、それらが必ずしも一致していないということに気づいていないことが多い。それを説明するために、認知言語学が用いるイメージスキーマを導入し、受動構文の前提とされてきた能動文の概念構造を解明する。

認知言語学の章では、これまでの言語観との比較をしながら、その根幹を成すいくつかの概念項目が紹介される。ラネカー（Langacker, 2000）の示す「参照点」は、人間が言語を媒体として意味づけの営みを行うという認知言語学の一般原理の説明と、事態認知の構造的・意味的なプロセスの解明には欠かせない。「図と場の反転」においては、人間が典型的な事態認知をする際、その対象のもつ意味の構成要素をすべて等価値には扱わないということを説明する。認知言語学が言語を「ゲシュタルト」的に捉えていることから、明らかに心理学の影響を受けていることが推測できるであろう。そして、人間の潜在的な認知過程には、「（広義の）視点移動」が伴う傾向にあるということが明らかにされる。こうした言語観の背景には「カテゴリー化」の問題や「プロトタイプ理論」が反映しているのだが、本稿の主たる目

的に関わる範囲でのみ、これらの用語（術語）に言及する。

また、認知言語学が広範囲に渡る関連領域を理論的基盤として包含していることを示唆するため、言語類型論的な受動構文の捉え方が紹介される。本来であれば、認知言語学と言語類型論とは別な章として議論を展開するべきところであろう。しかし、本稿は二つの理由で言語類型論の発想をあえて同じ章の中に組み込む。一つには、文化人類学的なの視点までも取り込むほど認知言語学が柔軟性に富んでいることを強調するためである。人間の心と言語に関わる問題を体系的に捉える認知言語学は、言語を他のすべてのものから自立させ、結果的に説明がつかなくなったことを「言語の恣意性」として片付けるようなことはしない。人間の認知にかかわる多くの関連領域の視点から言語を多角的に捉えているため、認知言語学は既に実証ずみのデータに支えられた言語理論として成立している。もう一つには、外国語として英語を学習する者が、論理的な思考だけでは解決し得なかった「英語と日本語の根源的な違い」に着目するためである。それぞれ二つの言語の背景には、文化的な認知の傾向性（即ち、より好ましいと感じられる「ものごとの捉え方」の差）というものが存在し、その違いが「行為中心のする的言語」と「状況の変化、及び、結果状態中心のなる的言語」という対立として言語のコードに表面化している。この対立を考慮することなしには、「同一の事態を異なる言語表現で表すもの」とされる能動態／受動態の関係が理解できないと考えたからである。

「**終わりに**」の章では、受動構文と能動文が同一の事態を言語化していることを前提に、主体的な人間の事態認知が典型的なプロセスで言語化された場合と、普段とは異なるプロセスで言語化された場合との違いを整理する。言語化の過程において受動構文と能動文のどちらか一方の選択を迫られた場合、「統語構造」と「意味構造」の両面に差が生じ、「認知の対象となる事態」と「認知主体」との関係に何らかの変化がもたらされるということが解明できれば、それは本稿にとって何よりの成果となる。また、本稿を通じ、英語を外国語として学ぶ者が機械的に行う「態の文法的変換操作」から、言語の本質に関る問題を認識する助けになれば、それは筆者にとって何よりの収穫と言えるであろう。

II．歴史的背景

本章は、受動構文の研究が言語研究の歴史の中でどのように行われてきたかを概観し、それがどの程度まで外国語として英語を学習する者に影響を与えているかを踏まえつつ、認知言語学的な視点の導入が受動構文の理解を深める可能性を探求する。

構造主義的な言語観の影響を強く受けていた時代において、言語は本質的に、その「形式が意味を規定する」と考えられていた。言語の機能は情報を伝達することにあり、それは文化や社会によって「コード化された記号」として成立している。従って、言語は「記号表現」と「記号内容」から成る記号体系であり、言語研究の対象はその構造を記述することであった。記号体系としての言語構造が研究対象であるということは、統語構造が言語使用におけ

る意味を規定するという考えと合致する。しかし、すべての言語体系には人間が実際に体験し得るすべての事象・現象を表現できるほど多くの構造が備わっているのかという疑念に対し、構造主義は明確な答えを出すまでには至らなかった。また、それほど多くの構造を処理する能力が人間の記憶装置（脳）にあるのか[3]という疑問にも対応できず、構造主義という言語観は排除されていく。

構造主義批判にも関わったチョムスキーが、変形生成文法理論によって、言語研究に新たな視点を導入する。チョムスキーが考えた人間に固有の言語とは、脳内に生得的に「普遍文法」があるために、その修得と運用ができるものであるとされている。言語運用能力のもととなるある種の「装置」があればこそ、ほとんどすべての人間は「貧しい刺激[4]（質的、量的に限られた情報）」が与えられただけで、特定の文化圏で使用される言語の文法を理解し、「理想の言語使用者」に成長することができると考えたのである。しかし、言語研究の対象を「文法規則の厳正な抽象化」とその記述に求めたため、言語に関連する他の領域を寄せつけなくなる。また、言語データの厳密な処理や分析に最適なものとして考案された文法理論には、その使用者である「人間の自然な振る舞い」が反映していないという点が批判の対象となった。他者とのコミュニケーションを通じて創り上げていく「意味」の問題に対し、もとより、チョムスキー自身の関心が低かったことが原因であったとも言えよう。とは言え、日常的に用いられる言語データへの適応性に多くの不備が指摘されると、チョムスキーの後継者たちは構造主義が解明しつつあったものを（即ち、体系的に言語構造の機能を研究する必要性を）再考するようになっていく。

次いで誕生した言語観は、当然のこととして、構造主義の視点とチョムスキー理論の両者に多くを学んでいる。そのため、言語の記号論的な解釈と、人間の認知能力が言語に支えられていると考えるという点で共通している。しかし、新しい言語観を提唱する研究者たちは、言語体系が構造を成すと考えてはいるものの、言語の形式的な側面より「実際の文脈における意味」に関心をよせていった。この**機能主義**的視点から、言語は本質的にその「意味が形式を規定する」と考えたのである。ここで言う「意味」とは、実際の言語使用の場における「言語機能」のことである。この機能を果たすために、人間は実際の言語使用の場で、言語体系における連合関係から範例（paradigm：パラダイム、文脈において使用可能な選択肢）を選択（choice）し、統合関係を形成していくと考えた。この「体系選択文法（systemic grammar）」理論は、ハリデーを筆頭に「機能文法（functional grammar）」として成立し、言語使用レベルにおける談話分析（discourse analysis）や語用論（pragmatics）に大きな貢献をしていくこととなる。

構造主義に対立する機能主義の視点を得たチョムスキーの後継者たちは、研究成果として、人間の心理的・身体的特徴が言語使用に反映していることを解明していった。その過程において、日常的に言語を使用する人間の物理的生活環境（地理的要因）、その人間が属している社会（文化的要因）、経験（後天的要因）など、これまでの言語研究では断片的にし

か扱われてこなかった周辺領域の研究の重要性を確信したのである。この新しい見地から、人間の言語は、事態認知・概念化・カテゴリー化・メタファーと関連し合いながらダイナミックに変化していくものとして捉えられている。その結果、言語は伝統的に定義されてきたように「自立的」で「閉じたもの」、「恣意的なもの」ばかりではなく、「動機付けられたもの」として位置づけられるようになった。そして、「意味というものは、それを主体的に認知する（特定の）人間にとっての意味である」という**認知言語学**を提唱するに至った。この新たな言語研究の学問領域が、言語には「情報伝達」という機能に加え、**人間の主体的な意味づけの営み**というもうひとつの機能の存在を明らかにしていく。

１－１．伝統文法から見た受動構文

伝統的な文法では、人間が同一の事態に対して複数の捉え方をしていることを認めてはいるものの、その現象に対して認知言語学とは異なる説明をしている。チョムスキー派の生成文法理論を代表的な例として引くと、次のような記述が見られる。

人間には固有の生得的能力として普遍文法が備わっている。そのため、人間は言語を習得し、それを運用する能力を持つに至る。いかなる事態も、他のすべての認知能力と連動して言語が概念化を担う。人間の認知能力と言語の構造的特徴から、人間による典型的（根源的）な事態認知の過程は有限個の統語規則から成ると考えられる。より自然な認知過程とその表出の仕方に一定の法則が規定されているのなら、統語規則を厳密に記述することにより、同一の事態を複数の異なる構文で表現するという現象が説明できるはずである。なぜなら、複数の構文が同一の事態認知に用いられている場合、一方は一定の条件を満たした根源的事態認知の表出（構文）で、他方はその講文に変形操作を加えた結果、新たに生成された構文であると考えられるからである。新たに生成された構文はすべて、根源的には同一の事態を概念化した結果となり、それらはみな同義であると考えられる。従って、文法的な変形操作は意味を変えないという一般化が可能になる。

生成文法理論の一般原理によれば、人間には有限個の典型的な事態認知を規定するスキーマ的構造[5]というものが既に備わっており、受動構文はその根源的な「深層構造」から派生した「表層構造」ということになる。こうした視点に基づいた指導法を採用する教員に教わった学習者は、何を学び、何を学んでいないのであろう。次の例文はカリキュラムに現れる受動構文の典型的な指導内容を反映している。

[3] i　Pat stole my surfboard.　[active]
　　ii　My surfboard was stolen by Pat.　[passive]

[4] i　The subject of the active (*Pat*) appears in the complement of the preposition *by*.
　　ii　The object of the active (*my surfboard*) appears as the subject of the passive.
　　iii　The verb of the active appears in the passive in the past participle form (*stolen*).
　　iv　The passive contains an extra verb, the auxiliary *be*.

(Huddleston and Pullum 2002, 1427-8)

教室で始めて受動構文を習う学習者は、その根源的な構文とされている能動文がどのようなものであるかという説明なしに書き換えの手順だけを指導されるため、能動文というものは受動構文を作り出すためだけに存在する文法操作の対象であるかのような印象を受けてしまう。また、すべての文が受動構文に変形されるわけではないという事実が明確に説明されていないため、他動詞構文を見たら必ずそれに対応する受動構文を作り出そうとする。こうした弊害を取り除くため、学校文法が求める書き換えという作業を検証する。

チョムスキーの文法理論では、能動文から受動構文を派生させるために、以下の変形操作（手続き）が要求される。

：能動文における主格の名詞句と目的格の名詞句の入れ替え、及び、それに伴う格変化
：主語の位置に移動した能動文の目的格の名詞句数と、述語動詞の時制をふまえたbe動詞の補足
：述語動詞の（過去）分詞化
：目的語の位置まで降格した能動文の主格の名詞句の前にbyを補充

この操作を変形生成文法規則で記述すると、次のような構造記述と構造変化の式になる。

NP1 + Aux + V + NP2 ⇒ NP2 + Aux + be + en + V + by + NP1

（田中他 1988, p. 473）

左辺の示す構造記述は、当該の変形操作がどのような構造をもつ記号列に適用されるかを示す。この式に二つの名詞句（NP）が含まれているのは、受動化変形操作が主語（NP1）と目的語（NP2）を備えた他動詞構文にだけ適用されることを表している。

先程の例文 [3] i/ii は、どちらも学校文法が言うところの「態の変換」として、誰もが経験してきた典型的な書き換え操作の例である。この文法的変形操作の手順には、言語使用者である人間がどのような時に典型的な事態認知をするのか、また、どのような時にそれとは異なる事態認知を選択するのかという説明がまったく提供されていない。従って、複数の異なる形式（構文）が「同じ意味」を共有しているということについて、何ら疑問を挟む余地が無いのである。更に、人間の根源的な事態認知とされる能動文が「他動詞構文（SVO構文）」で表され、それとは異なる事態認知には「自動詞構文（SVC構文）」[6] が要請されている理由も説明していない。高校生になればどちらの構文も「基本文型」として習うのだから、実際の言語使用レベルにおける両者の決定的な違いを認識させるべきである。

1－2．能動態から観た受動態：概念の捉えなおし

学習者は、英文法の授業で「～される」という意味に置き換えるための構文（文構造）と

してのみ受動態を学ぶため、事態認知に至るプロセスの違いがはっきりとしないまま放置されていることが多い。そこで、受動態に対立する能動態のしくみをやや単純化し、「視点の移動」として捉えなおす。ここでは、格文法の示す用語を整理しつつ、「**能**が**移動**するという**態**とは何か」を探求する。

（1）格文法の視点：能格と対格[7)]

能動態の能という文字が示すものは、意思・意図を持ち、行為の対象にエネルギーを送る（或いは、「働きかける」）能力を持つ行為の主体のことである。例えば、「（あるものを）投げる」という構文における「能」とは「（あるものを）投げる能力を持つ主体」のことであり、「（何かを）理解する」という構文では「未知の、或いは、理解の途中であったこと（例えば、知識、情報）を知る主体」のこととなる。多くの場合、「能」は「ある対象に働きかける能力をもつ人間を典型とした可動物」を指す。この「能」は文法上の主語と一致することもあれば、そうでないこともある。

① You can open the door with this key.（文法上の主語＝「能」）
② This key will open the door.（文法上の主語≠「能」）

典型的な能動態である①では、動作主となる行為の主体（You）が文法上の主語の位置に能格として現れている。従って、この文の能は「開ける」という能力を持つ主体として格付けされたことになる。しかし、①と同じ構造の文であるにもかかわらず、②の主語には「ドアを開ける」能力がないことが見て取れる。この文の主語は能とは言えず、従って、能動態ではないと判断される[8)]。

一方、能の働きかけによる何らかの影響を受ける対象を、便宜上、対と呼ぶことにする。例えば、「（あるものを）投げる」という構文における「対」は、「能」を動作主とした「投げるもの（例えば、ボールや石）」のことであり、「（何かを）理解する」という構文における「対」というのは「未知の、或いは、理解の途中であったこと（例えば、知識や情報）」となる。従って、典型的な「対」は行為の影響を受け、その結果、何らかの変化が生じる「もの」、或いは、「こと（がら）」ということになる[9)]。日本語の例で言うと、行為の主体に投げられたボールや石は「空間の移動」という変化をする。また、理解された知識や情報は、それを得た「人間の言動に反映」することから、行為の主体自身に影響を及ぼしたと考えられる。

③ John kissed Mary.
④ It takes three hours to go there.

③の文では、動作主のエネルギーが到達する先に対（文法上の目的語：Mary）がある。なぜ

なら、動作主の行為（kiss）が達成するためには、その行為を受ける到達先（goal）が必要だからである。そこには物理的な意味での変化が生じなくても、心理的な変化が起こっていることは予測できる。しかし、④は意味上の主語（to go there）を文頭に置き換えたとしても、目的語（three hours）には何らエネルギーが届いていない。そのため、③と同じ構造の文であっても能動態とは言えない[10]。以上のことから、英語の能動態を次のように定義しておく。

定義1：人間を典型とした動作主から発せられたエネルギーが、もの・ことがらを典型とした対象に向かって移動し、それが到達したその結果、そこに何らかの変化が生じたことを表す構文

英語の能動態は、1）エネルギーの発信源（動作主）、2）エネルギーそのもの（行為を表す述語動詞）、3）エネルギーの到達点（被動体）という三要素が必要であり、かつ、それらが統語配列（文構造）と一致していなければならない。従って、英語の能動態は他動詞構文であることも条件になる。

これまで能動態として分類されている例文の中には、こうした条件を満たしていないもの（例えば、例文④）が存在しているということはすでに見てきた。もしも、学習者が、そうした例文をわざわざ受動構文に書き換えてしまうという誤りを発見したら、それを指摘し、なぜ受動構文として成立しないかという理由を説明しなければならない。それを踏まえて、英語の能動態を定義する。

定義2：人間を典型とする動作主、行為を表す他動詞、もの・ことがらを典型とする被動体から成る
：他動詞構文である、即ち、統語レベルにおいて上の各要素が順列の関係にある
：すべての他動詞構文が能動態であるとは限らない
：従って、すべての他動詞構文に受動態が対応しているとは限らない

学校文法の「受動態」という項目は、少なくとも高校レベルで、その「発想」そのものを改める必要がある。繰り返されてきた誤りは、英語の他動詞構文は述語動詞の前後に必ず一つずつ名詞句があるという統語レベルの問題と、それらの名詞句の間にある関係という意味上の問題とを同一の次元で扱ってきたことに端を発していると考えられる。教壇に立つ者がこの違いを認識していなければ、今後も多くの学習者は混乱させられることになる。

（2）動詞の他動性：自動詞／他動詞

能動態という文法範疇が表しているのは、「能が対にエネルギーを伝える」ということと、「それが到達すると、対に何らかの影響が及ぶ」という行為の方向性である。この行為の方

向性が統語構造とどのような関係にあるか、即ち、文構成要素の配列と一致しているかどうかが能動文と受動構文との違いとして表面化すると考えられる。この「伝える」や「影響が及ぶ」という意味をより正確に捉え、能動態の概念構造を理解するために、動詞の「他動性」について観察してみたい。

池上（1991）は、学校文法が他動性を問題にしていないと指摘した後、他動性とは「行為の主体がその行為によって行為の対象にどの程度の影響を与えるか（p. 89）[11]」という、統語レベルと意味の両者に関わる問題として定義づけている。しかし、学校文法は基本文型の構造分類方法として自動詞／他動詞の対立だけを提供しているため、多くの学習者は目的語の有無だけで他動詞構文を分類し、「そこには必ず他動性があると判断する傾向にある」ということが予測される。直感的に、目的語が無い文構造は自動詞構文として分類され、目的語があれば他動詞構文として分類できるという判断基準は、それほど誤ったとらえ方ではないと思われる。しかし、だからと言って、自動詞構文の他動性は低く、他動詞構文の他動性が高いと断言できるのであろうか。

⑤　a)'　Mary sang.
　　b)'　Mary sang to the baby.
　　c)'　Mary kissed the baby.
　　d)'　Mary kissed the baby awoke.
　　Mary sang the baby to sleep.

（池上 1991, p. 89）

例文を順に見ていくと、a) は行為の対象を持たないので、その行為が他者に影響を及ぼすことはない。従って、そこには他動性が存在しない。次の自動詞構文には前置詞句として行為の方向性が示されているものの、必ずしもその行為が到達したという保障がない[12]。c) は典型的な他動詞構文であり、直接目的語に行為の影響が（直接）及んでおり、従って、そこには他動性が存在すると感じられる。d) は直接目的語の後に目的格補語が続き、行為の影響が及んだ後、その行為の対象に変化が生じたことが表わされている。行為の結果までを示す構文における他動性は、最も高いものであると感じ取れる。最後の例文は、他動性が低いはずの自動詞の例 a）と同じ述語動詞が用いられていることに注目してほしい。この動詞は、通常、a song/songs という目的語を伴う場合にのみ他動詞構文に現れるのだが、行為の対象と結果を表す不定詞とともに他動詞構文に現れると、本来あるべき目的語（a song/songs）を吸収してしまい（或いは、読み替えられ）、c) や d) と同じ他動詞構文として機能することになる。つまり、本来なら a) や b) のグループに分類される動詞であるにもかかわらず、c) を越えて最も他動性の高いグループに組み込まれているのである[13]。こうした現象が起こる理由は、これらの例文の構造に反映されているのであろうか。

⑥	a)'	Subject	+ Intransitive Verb		
	b)'	Subject	+ Intransitive Verb	+ Prepositional Phrase	
	c)'	Subject	+ Transitive Verb	+ Direct Object	
	d)'	Subject	+ Transitive Verb	+ Direct Object	+ Adjectival Phrase
		Subject	+ Intransitive Verb	+ Direct Object	+ to Infinitive

自動詞構文／他動詞構文の分類だけでは他動性の高さが判断できないということは、受動構文への言い換えができる自動詞構文／受動構文への言いかえができない他動詞構文が存在する可能性があるということが予測できる。つまり、⑥のa)とb)が自動詞構文だからという理由だけで、「受動構文になり得ない」とは断言できないということである。

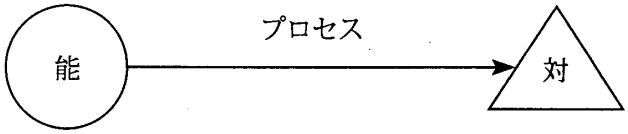
もし＜他動性＞の程度というものが…（中略）文法構造と平行して増減するというのであれば、問題は明快なのであるが、残念なことに、言語の問題はそう単純ではない。この場合も＜文法＞的に構造がどうなっているのかということの他に、＜意味＞的な要因が多く関与し、同じ構文の段階の中でも＜他動性＞の程度に差を生じさせたり、場合によっては、先の段階のものの方が後の段階のものより＜他動性＞が強いというような逆転すら起こりうる。

（池上 1991, p. 91）

池上（1991）によると、言語というものは、社会的コードとして確立していく文化的背景に強く影響される性質があり、そのため、言語の恣意性は否定できないものである。しかし、同時に言語の使用者である人間が主体的に言語を用いて外界を意味づけてきたために、現在あるような形で言語が成り立ち、維持されてきたと指摘する。これは、人間による「認知的意味づけの営み」が慣習化していく過程において、言語が動機付けられたもの（motivated）から恣意的（arbitrary）なものへと読み替えられてきたためであると考えられる。従って、言語のかなりの部分は人間に「動機付けられ」ており、それが体系的に言語の恣意的な面と絡み合っていると主張している。言語は、コード化された時点の有契性が有徴性（marked）として明示されていても、時間の経過とともに慣習化され、無徴性（unmarked）なものになっていく現象（従って、それは無契性なものとして捉えられる）に類似している。

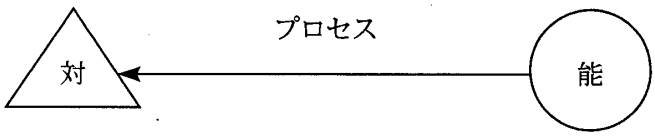
（3）イメージスキーマ

日常生活の中で、人間は常に他者（誰か・何か）と何らかの関わり合いをもつ。そうした環境における人間の行為の多くが、何らかの影響を他者に及ぼすということを表現しているのも不思議ではない。両者の間で移動するエネルギーは、結果的に、何らかの「変化」を引き起こすことになる。この一連の「行為の移動」をイメージスキーマで図式化すると、次のようになる。



多くの場合、「行為の移動」が時間軸に沿って起こるため、行為自体はその可動性とともに「プロセス」と呼ばれる。「受動構文」が「能動文」と同一の事態を表しながら、その「行為の移動」する方向で対立するもと仮定するなら、その行為の進行方向を逆転させた理由が存在するはずである。同一の事態の捉え方の違いが言語化の過程で「受動構文」を要請したと考えるなら、それぞれの構文はどのような捉え方の違いを反映しているのであろう。

他者の行為によって影響を受けたのが人間であれば、自身が生きる文化圏の中で最も典型とされる反応を示すであろうし、それがものであれば、その属性に従った結果を示すであろう。今、その反応（或いは、その結果）が注意に値するものであったとしたら、行為の主体よりその行為に影響された側に注意が向けられるということになる。このように、それまでほとんど注意が向けられなかったものに意識が働くようになるには、少なくとも二通りの理由が考えられる。一つには、その行為自体の影響力が強く、行為の対象が大きく変化するような場合で、そこで用いられる述語動詞の他動性は極めて高いものとして受け取られる。もうひとつ考えられる理由は、もとより行為の主体がさほど注意をひかない性質であり、そのため、行為の対象が際立つ場合である。（池上 1991, p. 96）どちらも、ある行為を中心に、その行為の主体と対象との間に発生する関係から、人間に複数の解釈をする可能性を提供している。そして、この主体と対象との逆転現象こそが、人間に受動構文を要請する原因になると考えられる。意味を決定する役割は事態を主体的に認知する（即ち、言語を用いて意味づける）人間にゆだねられていると認知言語学は解釈するため、この逆転現象は人間がもつ認知能力のひとつであると考えることができる。これをイメージスキーまで表すと、次のようになる。



これまで態という文法範疇に着目し、「ある行為の方向性」を観察することによって英語の構造と意味の双方向から受動構文を捉えなおしてきた。しかし、能動態が受動構文に読み替えられる理由を解明するためには、人間が同一の事態をその典型的な構文とは異なる統語構造で言い表す時、どのような心理的変化が作用するのかを理解しなければならない。次章では認知言語学の研究成果を背景に、行為の主体ではなく、行為の対象を文法的な主語の位置に昇格させるという場合の事態認知のしくみを解き明かしていく。その中でいくつかの仮説をたて、独自の議論を展開していく予定である。

Ⅲ．認知言語学

生成文法理論は受動構文を能動文に変形操作を加えた派生とみなし、それぞれが異なる統語構造をしていたとしても同一の意味を共有していると考えた。それに対し、認知言語学は受動構文を、人間が生得的な認知能力を用いてある事態を概念化する時に要求される統語構造（配列）の一形態であり、たとえ能動文と同一の事態を表わしていたとしても、認知の主体はそこに何らかの違いを読みとっていると考える。なぜなら、認知言語学は人間が外界を主体的に意味づけていく経路（認知プロセス）の違いが、異なる統語構造の選択として表出すると考えるからである。人間の言語使用は複数の認知プロセスからの経路選択に始まり、認知の対象を概念化する過程では言語が体系的に機能していると捉える。概念化の過程で重要な役割を果たした言語は、コミュニケーションが達成された後に新たな認知過程を形成し、より複雑な事態認知に対応をしていくのである。

一連の事態認知の過程で、認知の主体となる人間は自らに備わった認知能力を用いて意味づけを行う。自身にとって最も心地よい（或いは、都合の良い）事態の捉え方が統語構造に反映するため、人間の言語使用は必ずと言ってよいほど「揺らぎ」の中で実現されていく。なぜなら、人間は自由意志に基づいて行動するため、いつも同じパターンを繰り返すとは限らないからである。人間の認知（概念化・言語化・更なる認知プロセスの形成）が日常的なコミュニケーションに反映しているのなら、外界の主体的な意味づけの営みはカテゴリー化の問題とも深く関り合いをもつ。なぜなら、人間は経験から事態をカテゴリー化し、その構成要素の中に典型的なもの（プロトタイプ）を設定し、更には、カテゴリーのメタファー的な拡張を行いながら意味（の領域）を拡張しているからである。

言語使用レベルにおいて同一の事態に複数の構文（統語構造）が要求される事実は、言語の本質と密接に関りあっている。そして、受動構文と能動文との関係もまた、人間の主体的認知活動の過程で繰り返される「事態認知の読み換え操作」を反映している。以下、受動構文が人間の認知活動とどのように関り合っているのか、認知言語学的な言語観と言語類型論的な視点から考察する。

1．認知言語学的な言語観

認知の主体となる人間は、認知活動を行う時間や空間、場面や状況、認知の対象にさまざまな意味づけを行う。この「主体的な意味づけの営み」は、年齢、性別、環境、経験、情報量等という個別の「背景的要因」や、前／後、左／右、上／下等の非対称性という「身体的特徴」の影響を受けながら行われる。従って、複数の人間が同一の事態に異なる意味を読み取るだけではなく、時間の経過や空間の移動により、同じ人間が同一の事態に異なる意味を読み取るということも起こりうるのである。また、典型的な事態認知のプロセスというものだけが解明されたとしても、それが常に採用されるのでなければ、人間の認知は常に揺らぎを持ち続ける。その揺らぎは、言語化の過程における構文選択にも影響を及ぼす。従って、

同一の事態に異なる構文が用いられるということは、**同一の事態に対して異なる意味を読み取った**ということになる。これこそ、「形式が異なれば意味が異なる」という認知言語学の一般原理である。一連の認知活動は、人間の言語使用と切り離して考えることができないのである。

認知言語学的に受動構文を捉えなおしていくためには、人間が事態認知をする際により自然な方法として採用する構文の概念構造を理解することが必要である。典型的な事態認知とは異なる過程で認知するという現象にはどのような要因が含まれているのか、**言語と人間の心**という視点から考察することが求められる。

１－１．事態認知とコミュニケーション

ここ数年来、「コミュニケーション能力」という言葉をよく耳にするようになった。この情報伝達の能力は人間だけが持つものではなく、動物（特に、哺乳動物）にも備わっていると言われている。しかし、とりわけ人間の言語というものは最も洗練された情報伝達のメディア（媒体）であり、この言語を獲得したことで人間は他の動物と区別されていると言っても過言ではない。動物と人間がもつコミュニケーション能力の違いを比較することにより、受動構文の成立過程を捉えなおしてみたい。

人間以外の動物特有の情報伝達方法（コミュニケーションの手段）があるとすれば、それは人間が生得的には持たない身体的特徴を駆使したものである。例えば、聴力が発達したイヌ科の動物にだけ聞こえる波長を利用したイヌ笛を人間は認知することができない。象には数十キロ先の水のにおいをかぎ分ける嗅覚があり、麒麟の視力は人間の十倍以上とも伝えられている。こうした身体的特徴（とりわけ、「感覚器官」）の違いにより、動物は人間には実現不可能なコミュニケーションを可能にしていると考えられる。しかし、動物が受信する情報の多くは周囲から一方向的に伝えられるものであり、それを相互に共有しているとは考え難い。自然からの情報は「刺激」として受け取られるので、それに対し、動物は進化の過程で生き残った他の生命体と同様、環境の変化に順応していくための本能的な「反応」を示すだけである。従って、自然からの情報は、新たな情報に対応していくための「行動規範」として再編成されていくようなことはない。それはむしろ、生物学的に遺伝していく特性として身体的な特徴に反映されていくのである。

人間以外にも、進化の過程で脳を肥大させ、より洗練された情報伝達の能力を獲得した哺乳動物が相互に意思の疎通を可能にしているという多くの事例や研究結果が発表されている。そうした動物の情報伝達のしくみは、多くの点で未だ十分に解明されていないことが多く、そのほとんどが「生命の謎」として扱われている。しかし、研究途上にあることを根拠として、哺乳動物のコミュニケーションが人間のそれと同じ程度（或いは、それ以上）のものであると考えるのは早計であろう。なぜなら、動物相互のコミュニケーションというものは、自らが生きながらえていく上で必要十分な情報を優先的に入手するためだけに発達させ

たものであり、人間の社会生活に対応できるほど複雑なものではないと考えられるからである[14)]。一例として、人間の言語が備えている時制の概念を動物の世界に置き換えて考えてみよう。自然から伝わるリアルタイムの情報に対応することで種を存続させてきた動物は、過去の記憶をたどって懐かしむことや、将来の不安（材料）を他者に伝えながら世をはかなむようなことはしない。また、その場に存在していないものを想定して身構えたり、後になって何かを悔んだりもしない。

人間は進化の過程において言語を獲得したため、動物が獲得できなかった事態の認知という過程を経てコミュニケーションを図るようになった。言語を媒体とした認知活動が人間と動物とを区別する大きな要因となっていることから、言語使用による外界の意味づけは人間の特性として考えることができる。人間のコミュニケーションが統語配列規則（文法）に従って実現すると仮定すれば、人間の事態認知が言語化の過程で統語構造に反映すると考えるのは、ごく自然なことである。例えば、実在する事象を越えた空想、皮肉、後悔、反省（俗に言う、「たら、れば」）を「仮定法」という統語形態（構文）を用いて言語化し、時間と空間を越えた他者への情報伝達を実現するために「話法の転換」を行うことなどは、人間の日常的な情報交換において頻発する。また、二者の対立するものを比較するには、語彙レベルでの形態変化とともに、比較の対象となるものを前置詞句（日本語では後置詞、助詞）とともに示すこともよい例である。

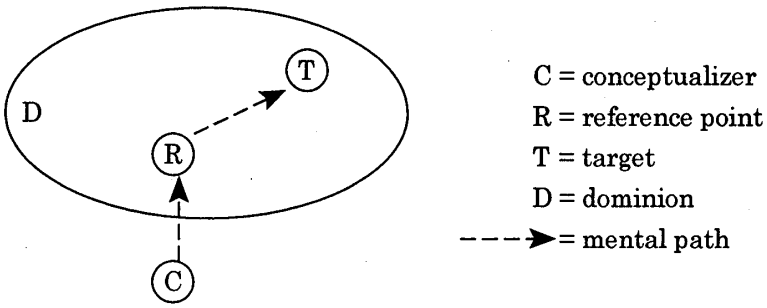
人間は言語を獲得し、それを媒体とした認知能力を得た。社会生活の中で必要となる情報が複雑になると、それに対応するために情報交換の手段を洗練する必要に迫られる。同時に、言語使用による外界の認知は、動物の本能的な行動に比べ、時間的な遅れを生じさせることになった。もし、この遅れが人間という種全体に及ぼす影響力が非常に大きなものであったら、人間は現在とはと異なる手段・方法でコミュニケーションを成立させなければならなったことであろう。

1－2．人間の認知と言語

人間が進化の過程で獲得した「認知過程」が言語とどのように関り合っているのか、認知言語学が提供する用語を交えて捉えなおしてみたい。

（1）参照点と到達点

人間がある対象を認知する際には、必ず何か別の対象を経由して捉えている。この認知プロセスがかなり多くの言語に反映されていることから、それが人間の本質的な認知傾向として考えられている。これを図式化すると、以下のようになる。



(Langacker 2000, p.174)

C で示された認知の主体は楕円で囲まれた意味領域中に参照点（reference point）を設定し、それを経由して特定の到達点（target）に達していることが点線で示されている。参照点と到達点を談話（discourse）レベルで捉えなおすと、話し手は特定の参照点を設定し、そこを経由して指示対象にまでたどり着く。聞き手はその話し手が用いた言語を媒体とし、新たな情報を参照点として事態を認知する。累積する情報を共有して、自分の発話をそれに上乗せしていく。会話に関与している人間が双方向から意味の領域（dominion, or domain）に働きかけることで、人間はコミュニケーションを成立させているのである。では、問題となる英語の受動構文を用いる時、話者はどのような参照点を心理的に設定しているのであろう。この疑問に答えるために、ここで英語の基本文型の構造を確認してみたい。

Ⅰ		ϕ	：副詞句を伴う場合もある
Ⅱ		名詞句／形容詞句	：補語を伴う
Ⅲ	主語＋述語動詞	名詞句	：典型的な他動詞構文
Ⅳ		名詞句　＋名詞句	：二重目的語構文
Ⅴ		名詞句　＋名詞句／形容詞句	：使役・結果の構文

英語の基本文型にはどれも主語と述語動詞が含まれていて、後続する構成要素の性質によって表現のバリエーションを拡張させている。とりわけ、主語はその属性（数や性質）によって動詞を活用させ、統語レベルの「名詞句第一項主格」として顕在することからも、かなり目立った存在であると言える。この事実を英語の事態認知と主語（の選択）の問題に置き換えると、次のような仮説が立てられる。

仮説 1：人間の事態認知は認知の主体が選択する主語を参照点として行われる [15)]

ここで、意味レベルの問題を重ね合わせて人間の事態認知を捉えなおすと、人間の典型的な認知と言語の問題がより詳しく見て取れる。典型的な人間の事態認知は、認知主体の目の前で起こっていることを時間軸に沿って言語化し、それを文構造に反映させることによって実現する。これを意味レベルで換言すると、「動作主（agent）の発したエネルギーが、受け

手（被動体:patient）に向けて移動する」となる。従って、典型的な人間の事態認知は、文法レベルの「主語」と意味レベルの「動作主」が一致しているものであると考えられる。これは統語構造における他動詞構文であり、文法レベルの能動文である。以上をもとに先ほどの仮説1を修正すると、次のようになる。

仮説2：人間の典型的な事態認知は言語化された第一の情報を参照点とし、それは認知の主体が選択した「主語」として顕在化する
：認知する事態は「行為の移動」として捉えられ、文法レベルの主語と意味レベルの動作主が一致している能動文、統語レベルでの他動詞構文として実現される

これら二つの仮説から、能動文は主語と動作主が一致し、受動構文では主語と動作主が不一致になることがわかる。これまでの議論から、典型的な事態認知には能動文が用いられるが、1）行為の影響力が非常に強く、従って、認知の主体となる人間が行為の主体よりも、むしろその影響を受けた行為の対象に「際立ち」を感じた場合、2）行為の主体がもともと際立った性質のものでない場合、認知の主体（人間）は行為の対象を焦点化し、そのため「行為の移動」が逆方向に進むものとして捉える（読み替える）ことになる。それに伴い、統語構造の変化が要請され、受動構文が用いられることになるのである。以上をもとに英語の受動構文を捉えなおすと、次の仮説が成立する。

仮説3：人間の典型的な事態認知は「名詞句第一項主格」を参照点として行われ、それは認知の主体が選択した文法上の「主語」として顕在化する
：人間の典型的な事態認知において、文法上の「主語」と意味レベルの「動作主」は一致する
：文法上の「主語」と意味レベルの「動作主」が一致していない[16]受動構文は、典型的な事態認知とは異なるプロセスでの「意味づけの営み」を反映している
：認知の主体がある事態を「逆方向の行為の移動」として捉えなおした場合には、それが統語レベルでの自動詞構文として実現される

これまで見てきたように、認知の主体である人間には、「行為の主体」と「行為の対象」の両者を参照点として事態認知を行う能力がある。つまり、言語化された意味レベルの「動作主」と「被動体」は、どちらも認知の主体にとって際立ったものとして読み取られる可能性があるということである。認知の主体が文法レベルの「主語」、意味レベルでの「動作主」を「名詞句第一項主格」とした場合、その統語構造は行為の主体を経由してから行為が達成されるまでの過程に意識が働くため、典型的な他動詞構文として実現する。これを談話レベルで聞き手の側から捉えると、典型的な他動詞構文は行為の移動が統語構造と同じ方向に進

むものとして理解されることになる。それに対し、文法レベルの「主語」、意味レベルの「被動体」を「名詞句第一項主格」とした場合、その統語構造は行為の対象を経由してから行為が達成された結果に意識が働くため、典型的な他動詞構文ではなく、自動詞構文として実現される。これを談話レベルで聞き手の側から捉えると、自動詞構文（ここでは、SVC の受動構文）は、もはや行為の主体から行為の対象に行為が移動し、その影響が行為の対象に及ぶということではなく、「外的な力の働きかけにより、誰にも操作できなくなった（結果）状態にある」という認識をする。これこそ受動構文が要請される典型的な原因であると考えられる。換言すれば、「何かをスル」という動的な行為は概念レベルで背景化し、「ある状態にナル／アル」という静的な状態の描写が受動構文の中で前景化しているのである。

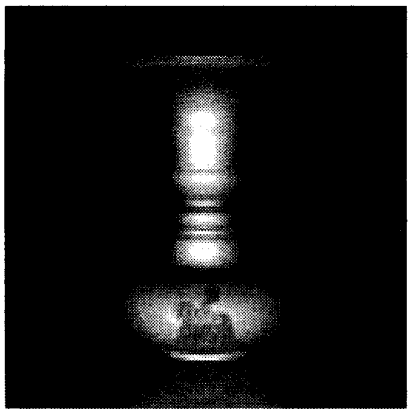
（2）焦点化：図と場の反転

言語化以前の概念レベルにおいて、認知主体の意識がある事態の特定部分に引き付けられることを焦点化（プロファイリング）[17] という。人間が典型的な事態認知をする際、行為の主体が先ず焦点化され、次いでその行為の移動、そして最後にその行為の対象に目が向けられる。この過程は典型的な他動詞構文に見られる。しかし、その焦点化が行為の対象に向けられた場合、言語化の過程で典型的な認知過程とは異なる経路をたどることが要求される。結果的に、先ず行為の対象が焦点化され、その行為が行為の対象の意図に関わりなく実現されたことが表わされる。その際、行為の主体は客体化され、任意に表面化するだけである。これは明らかに典型的な統語構造とは正反対の構造が要求されたことを示しており、ここに受動構文が成立するのである。

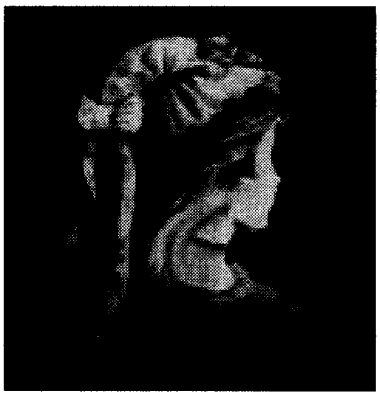
焦点化が起こった部分に意識が引き寄せられると、意識の中でそれは前景化する。例えば、登山をしている最中、富士山を背景に写真を撮ったとする。カメラの焦点は通常人物に合わせられるので、富士山の焦点は比較的あまくなるであろう。物理的にも前景となる人物は、その写真を思い出として残すのに十分なものとして映し出される。しかし、その写真に写る富士山を意図的に焦点化した場合、先ほど見たものとは異なる光景を目にすることになる。つまり、先ほどと同一の写真を見ている状況でも、認知の主体が物理的に遠い富士山を焦点化すれば、富士山以外のもの（例えば、周囲の風景や人物）の焦点はあまくなる。このように、人間の意識がどの部分に向けられるかによって、しばしばその「前景」と「背景」とが逆転する。この現象こそが「図と場の反転」である。

人間の認知プロセスの中でも、「図と場」の概念は重要なものである。人間がある対象を認知する場合、その対象を直接的に捉えるのではなく、参照点を経由することは前に述べた。その参照点となるものが、全体を大まかに捉えようとする、いわゆる、認知前の段階である。そこから、我々の視点はカメラの焦点を合わせるように認知の対象に向けられていく。この段階で、認知の対象以外のものは背景化していくのである。ここに前景化されたものが「図」、背景化されたものが「場」となる。

図と場の関係は、一般的に、輪郭の有／無、具体／抽象、小／大、前／後、人間性の度合い（例えば、固有代名詞／人称代名詞）などの対立から判断が可能であると考えられている[18)]。しかし、その関係は普遍的に固定化しているわけではない。だからこそ人間の認知能力は、しばしば図と場を反転させるのである。この認知能力は、前景化されていたものを瞬時に背景化させ、これまで背景であったものを前景化する。この能力をより具体的に感じるため、下の二枚の絵（「ルビンの壺」と「婦人と老婆」）を観察してみたい。

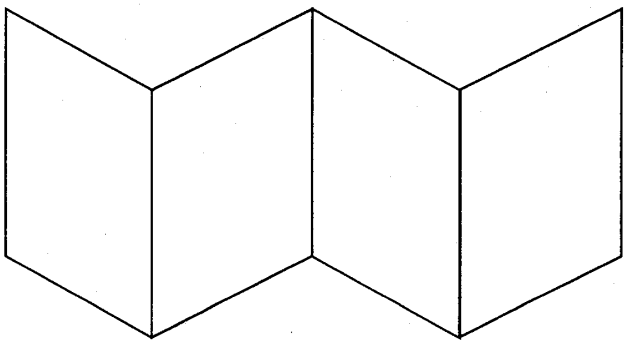


ルビンの壺（盃）



婦人と老婆

左の「ルビンの壺（盃）」は、前景となる物体を焦点化したときにだけ認知されるもので、背景の影を向き合う二人の人物として認知したときには意識の中にうもれていく。右の「婦人と老婆」の絵では、うら若き女性の横画に焦点が当てられている時には気づかない老婆が、首飾りを口紅に、耳を目に、顎の線を鼻に見立てた瞬間、前景化する。それと同時に、若い婦人の存在は背景化してしまうのである。このように、「図と場」の関係は瞬時に入れ替わるだけではなく、一方が焦点化されたとき、必ずもう一方が背景化しているため、同時に両者を焦点化することはない。これは丁度、下の図ではどの部分が前面にあり、どちらが後方にあるかを瞬時に言い難いのと似ている。



これまで検証してきたように、同一の事態が「能動態／受動態」という異なる言語表現で表されることに対し、文法レベルでは相互の書き換えが可能である事実を示すことができれ

ば十分であった。しかし、認知のレベルでは、「能動態／受動態」が示す違いというものは文法レベルの理解をはるかに超え、統語レベルと意味レベルに顕在化する現象を同時に検証する必要性を暗示している。認知のレベルにおいて受動構文のしくみを解明するためには、統語レベルでの「他動詞構文／自動詞構文」の対立から、意味レベルにおける「構文の構成要素と、その相互関係」にまで言及しなければならないのである。

2．言語類型論的な視点

本節の主たる目的は、本稿が最初に提起した「なぜ SVO の他動詞構文が SVC の自動詞構文に読み替えられるのか」という問題に対し、言語類型論的な視点からその答えを導き出すことにある。そのため、英語と日本語の類型を比較しながら、英語の受動構文が「SVC の自動詞構文」を要請する理由を解明する。

言語の類型は、それぞれの言語が異なる文化の中で成立しているという事実に基づき、言語を相対的に特徴付ける（或いは、分類する）ことによって解明されていく。言語を体系的に分析し、可能な限り多くの言語に渡る「言語の本質」を見出そうとする一方、言語類型論は「文化が違えば言語が違い、その違いはさまざまな傾向（嗜好性）として言語に顕在する[19]」という仮説を踏襲する。類型論的に捉えると、日本語と英語にはどちらも能動態／受動態という対立があり、それぞれ他動詞構文／自動詞構文として実現する。その一方で、平行関係にあるように見られるこれらの対立には、それぞれの文化の違いというものが介在し、それが微妙な違いとして「捉え方」に反映していると考えるのである。そこで、英語に関して、他動詞構文を典型とした能動文が自動詞構文を用いた受動構文に読み替えられる時、とりわけ、その自動詞構文が be 動詞を用いた SVC 構文である時（或いは、少なくとも SVC 構文と同じ文構造である時）、認知の主体である人間はそこに何を捉えているのであるかを探求する。

2－1．文化記号論的発想：＜スル＞的な言語／＜ナル＞的な言語

客観的に日本語と英語の類型を捉えた場合にどのような一般化が可能であるかを、池上（1992）の仮説に求める。

仮説Ⅱ　言語外的な出来事が言語によって表現される場合、(1) その出来事に関与して＜動作主＞として行動する＜人間＞に注目し、それを特に際立たせるような形で表現を構成する傾向、(2) その出来事を全体として捉え、そこに＜動作主＞として行動する＜人間＞が関与していてもなるべくそれを際立たせないような形で表現を構成する傾向、がある。英語は (1) の傾向が顕著な言語であり、日本語は (2) の傾向が強い。

池上（1992, p. 278-9）

池上はここで、個体／連続体という動作主の対立が、状態の変化／場所の変化という叙述の

対立の中で分類を困難なものにしていることを指摘したうえで、英語の類型を「個体 → 場所の変化」型、日本語の類型を「連続体 → 状態の変化」型という対立で捉えようとしている。その根拠として、英語における動作主としての主語の「義務化」と、日本語が主題の提示までも「高度に任意的(optional)」であるという傾向を挙げている。ここで言う主語とは、文法範疇でさまざまな特権（例えば、「動詞や数との一致」）を表す文構成要素であり、主題は単に文頭に置かれる文のトピックのことである。英語が個体（特に、動作主としての人間）を際立たせようとする傾向を、日本語が個体を可能な限り際立たせない（例えば、固体から連続体への「捉えなおし」という）傾向をもつという対立は、この主題化、主語化、義務化によって類型化されると考えているのである。

英語と日本語における「個体の際立ち」という問題に関して、池上は個体への志向性／連続体への志向性という対立によって、名詞の可算／不可算という表記に言及しようとする。それを簡略化ものが、下の図である。

	単数可算名詞	複数可算名	不可算名詞
限定詞（a/an）	＋	－	－
限定詞（the）	＋	＋	＋
動詞との一致	＋	－	＋
対象を＜個体＞として捉える	＋	＋	－
対象を＜連続体＞として捉える	－	＋	＋

特に最後のカテゴリーに着目し、「複数可算名詞」と「不可算名詞」の間にある類似性を、次のように説明している。

集合を構成する個体が（数が多くなったり、大きさが無限に微小になったりして）際立たなくなればなるほど、＜個体の集合＞は＜連続体＞に近づく。数個の石であれば＜個体の集合＞というレベルで捉えられる（'several stones'）が、砂浜の砂というようなものになると＜個体＞は＜全体＞の中に埋没し、全体として＜連続体＞同様の扱いを受けて、例えば「水ノ流レ」と同じように「砂ノ流レ」というような捉え方をすることも可能になる。

池上（1992, p. 284）

一般的に日本語には単数／複数という区別がない。この現象は、池上の言葉を用いると、「(他から自立した）＜個体＞という概念を際立たせないという顕著な傾向と結び付けて考えることのできる」ものである。

「複数」という対立項があって「単数」の表示は対象の＜個体＞性を積極的に表しうるようになる。そのような対立が欠けているような場合には、たとえ＜個体＞が提示されていても、それが他から自立した＜個体＞として際立たせられる度合いは少なくなる。

池上（1992, p. 286）

消極的な個体の捉え方（逆に言えば、積極的な「背景化」の傾向）は、本来、焦点化されて際立つ性質のものを「場所」として捉える日本語の重要な特徴であると説明されている。池上の議論を少し先取りすると、日本語には個体を連続体として読み替え、それを自立しているものから文字通り「背景化」させ、事態の全体に埋め込んでしまう傾向が見られるということである。その傾向は、動作主となる人間さえも「（自らの力を）はるかにこえた何かによってある結果がもたらされるというような形の表現を好む言語（p. 313）」において、「場所化」されるのである。

英語が日本語のこうした特徴に対立するのであれば、＜モノ＞としての個体、とりわけ人間が際立つことを要請する言語であるということになる。これを単純に統語レベルに置き換えると、英語は固体を積極的に際立たせようとし、その属性が他者への影響として顕在する能動態（他動詞構文）で事態を認知する傾向がある。従って、それと同一の事態を受動態（自動詞構文）に読み替えるということは、**個体の積極的な背景化、及び／または、個体の消極的な捉えなおし**をしたことになる。これは＜モノ＞として捉えていた個体を＜コト＞として捉えなおし、「場所の移動」として捉えていたものを「状態の変化」として捉えなおしたことの言語化である。これは、動作主が「（自らの意図とその属性に従って）～スル」という「運動」が、受動構文の選択によって「被動体が（人為の及ばない）～にナル」という「推移」として読み替えられたことを顕在化させていると捉えることができる。

２－２．日本語文法的発想：存在文／行為文

前節の後半で、英語と日本語は、もの（とりわけ、人間）／こと（或いは、それが起こる場所）という対立をそれぞれが好む傾向にあるということはすでに述べた。この対立の根拠を、金谷（2003）は日本語と英語の「基本文」という概念に求めている。金谷の言う「基本文」とは「組み立ての最も簡単な文（p. 31）」のことであり、英語の場合で言えば「基本５文型」ということになる。金谷によれば、日本語の基本文は「日本人だ」、「寒い」、「笑った」の三例だけであり、これらは順に 1）名詞文、2）形容詞文、3）動詞文となる。これらの基本文例は、それぞれの活用をすべて含むもの（例えば、「好きだ」の場合、「好き（です、ではありません、でした、だった）」など）の代表である。そして、この基本文はどれも日本語の『「ある」に支えられている』と考えている。更に、これらの基本文の現在／過去、肯定／否定の各文を組み合わせ、そこに日本語の類型を見出そうとしている。それを簡略化してまとめたものが、下の図である。

	名詞文		形容詞文		動詞文	
	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定
現在	日本人だ	日本人じゃない	寒い	寒くない	笑う	笑わない
過去	日本人だった	日本人じゃなかった	寒かった	寒くなかった	笑った	笑わなかった

（下線部は、金谷自身が言及していない箇所を筆者が強調したことを表す）

金屋はそれぞれの基本文に「ある」の存在を探し出し、かなりの確立で日本語が「ある」の影響を受けていることを指摘している。その一例として挙げた形容詞文の説明を引用する。

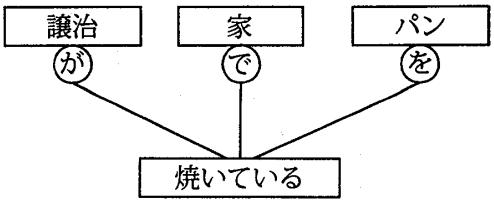
形容詞文も現在・肯定文を離れた途端に「ある」のお世話になる。その例が否定形の「寒く・ありません」であるし、過去形の「寒かった（寒く・あった）」などである。否定形のもうひとつの形である「寒く・ない」の「ない」も、先ほど見たように丁寧体「ありません」に相当する普通体の「ない」である。そうすれば「寒く・ない」もまた「寒く」は副詞だから、「何／誰かが「寒く」（という状態で、そこに）ない」という否定された存在文（ある文）と解釈すべきである。古文には「寒し」と並んで「カリ活用」の「寒かり」もあった。「寒かり」は「寒く・あり」だから、こちらは現在・肯定文から既に「ある」の存在文だ。現代日本語で否定形の「寒く・ありません」はカリ活用「寒く・あり」から派生したものである。

金谷（2003, p.33-4）

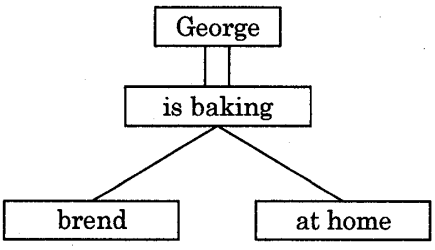
日本語の基本文における「存在文（～が／である）」の確立は、金屋の算出法（p. 34）によれば75％以上になり、その数値からも日本語が「人間の積極的な行為」より「何かがそこで自然発生的に起こる」、或いは、「ある状態で、そこにある」という発想を基本に言語化する傾向が強いということを指摘している[20]。

「ある」によって裏づけられた「存在文」が日本語の傾向を強く表わしていることは、金屋が日本語と英語の文型図で示している対立からも見て取れる。金谷は、日本語には本来主語というものがなく、「英語の文法を、何のためらいもなくそのまま日本語の文法に取り入れた学者が犯した過ちである」と主張する。この文法観で特筆に価するのは、三上章という日本語文法学者の影響から、日本語の「～は」／「～が」という典型的な主語（と捉えられてきたもの）は、実は「主題」／「主格補語」であるとする議論である。金谷の文型図で日本語と英語を比較する。

盆栽型（日本語の基本文型）



クリスマスツリー型（英語の基本文型）



（金谷 2003, p.64）

二つの「ツリー図」は、金谷自身が外国語としての日本語を教えている経験から思いついたというもので、左の「盆栽型」が日本語、右の「クリスマスツリー型」が英語の基本文形を表している。「盆栽型」について、金谷自身の説明を聴く。

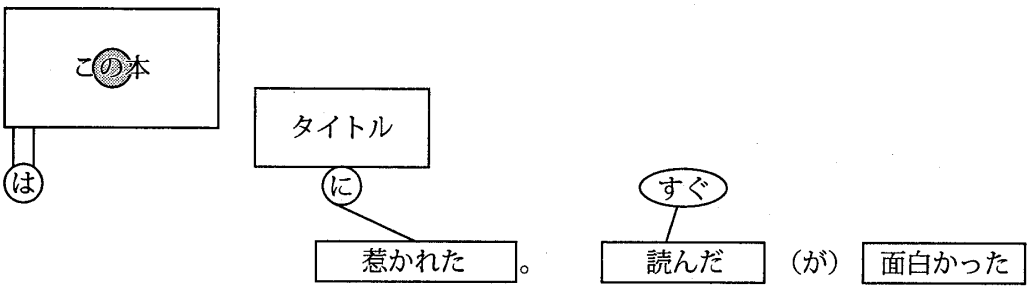
背が低く（上下二段）、上向きに枝を広げていることからの連想だ。この図のポイントは、三上章が主張したように、「が」を他の格助詞と同じレベルに置くということだ。つまり、･･･（中略）「譲治が」は「主語」ではなくて、「が格（あるいは主格）補語」にすぎない。基本文「焼いている」に対して、3つの補語があるという構造である。これら「が格」「で格」「を格」の3つの補語は同じレベルに並立されており、これらの間には移動の自由さえ許される。ここでは「で格」補語を文頭においてみたが、「が格」「を格」など別のものでも構わない。また全てが補語であるから、必要がなければ言わなくてもいい。

（金谷 2003, p. 63-4）

これに対する「クリスマスツリー型」は、文法上の主語の義務化や意味上の動作主が特権的な場所に位置づけられているため、「盆栽型」に比べて垂直方向に高い（三段）。文頭の主語はいかなる文にもあり、それが動詞を活用させている。この主語と述語動詞が二重線で結びついているのは、動詞の活用との関係から「主語がなければ文が作れない」英語の特徴を顕著に表している。

「が格」を主格補語とした金屋は、次に「は格」を主題として捉え、これを「盆栽図」の外に設定する「日の丸盆栽型」を持ち出す。その意図は、「は格」でさえ日本語の文法では「主語」にはならず、それほど動作主を要求しない「場所中心」の言語であることを強調するためであると考えられる。また、この「主題」に topic という英訳をつけ、その語源がギリシャ語の topos（「場所」の意）であることを指摘する。

日の丸盆栽型（「は格」を含む、日本語の基本文型）



（金谷 2003, p.76）

2－3．結論

日本語と英語を類型論的に比較することによって、それぞれの言語がそれぞれの文化の中でコード化されてきたことを顕著に示していることを明らかにした。互いの言語は、その使用者である人間の外界の認知とともに、現在ある姿にまで発展してきたものである。相対的

な比較が行われさえすれば、類型論的な議論は言語の本質に接近するうえで効果的なものと言えよう。

日本語の文法には主語がないという議論をもとに、「もの」に固執する「する」型言語の英語に対し、「場所」に執着する日本語の「ある」的な側面をわずかながらも浮き彫りにすることができた。この対立は、それぞれの文化を構成する人間が、自然とどのように関り会ってきたかが反映するということを示唆する。一例を挙げると、山に対する姿勢の違いが文化を二分すると言われている。山を征服するべき対象として捉える文化は、その対象を個体として認識し、人為の及ぶ限りを尽くして征服に至ろうとする。一方、山に生き、その環境に順応し、その恩恵に浴する文化は、良くも悪くも山を生活の場として認識し、自分たちの生活の延長上に山を感じることになる。この一体感が「連続体」への志向性を育み、それが言語に反映していると考えるのは、ごく自然なことである。

これまでの議論から、他動詞構文（能動態・行為文・～する）／自動詞構文（受動態・存在文・ある）という対立を受け入れるのなら、英語の受動構文は、次の定義の間で揺らぎながら意味づけられていくものとなる。

：行為の対象を積極的に前景化するが、そこには主題性だけが反映する（連続体、或いは、客体化）
：行為の主体を背景化し、事態全体の中に組み込む（場所化）
：動的な行為（場所の変化）は、静的な存在（状態の変化）へと読み替えられる（推移）
：文法的な主語（意味上の被動体）のみならず、行為の主体（意味上の動作主）の力さえも及ばない事態の描写となる

Ⅳ．終わりに

人間がなぜ通常とは異なる事態認知の方法として受動構文を用いるのかを理論言語学的な視点で捉えなおしてみた。英語の、しかも「be動詞＋過去分詞」の構文に限った認知プロセスの解明を目的とした研究であったが、類型論的な視点から日本語と英語を比較したことで、言語を体系的に捉えることの重要性は確認できた。

今回の研究で、日本語が空間を意識した「存在中心の言語」という傾向をもつのに対し、英語は行為の達成に関与する主体を重視する「行為中心の言語」という傾向があるということを明らかにした。二つの言語には、通常とは異なる認知過程を選択することにより、典型的な認知とは異なる視点を獲得することができる能力が潜在的にある。この事実を認知言語学的に解釈すれば、言語には典型的な認知による表現と、それとは異なる解釈を含意した表現とがあり、どちらを選択するかは認知の主体にゆだねられているということである。日本語が「する」的に、英語が「ある」的認知プロセスを用いたとき、通常では発見できなかっ

た「意味づけに」到達する。言語はこのように「捉えなおし」を繰り返し、現存する言語の恣意性から脱却しようとする方向へと進む。しかし、それは同時に、人間が必要に迫られて新たな認知プロセスを創り出す原動力となっていることに注目したい。「歴史的に観ると、以前はAであったものが今はB」という時、我々はそこに何らかの理由(人為的な「動機付け」)を求め、それが現存する言語コードのどの部分に反映しているのかを探求しなければならない。この点において、通時的な言語研究は必要である。同時に、既に確立されている言語コード（文法・慣習化された語法）が、言語の体系にどのように関わりあっているのかを共時的に（特に、類型的に）捉えることも重要なのである。

「する」言語である英語の典型的な他動詞構文は、その行為の及ぶ方向を逆行させることによって受動構文と見なされてきた。しかし、本稿はこの前提に以下の二点で対立する考えを提示してきた。

1. 従来の能動態／受動態の交代は、他動詞構文／自動詞構文の対立として捉えるべきである
2. 助動詞として捉えられている受動構文のbe動詞は、本動詞としての性質をまだ十分に残している

1. で受動構文を自動詞構文として捉えることを提唱しているのは、行為に焦点が当てられる「する」的言語の英語が受動態を要請したとき、人間を認知の主体とした典型的な他動詞構文による意味づけではなく、人為の及ばない事態の認知（即ち、存在としての「ある」、状態としての「なる」）として意味づけている点を強調するためである。また、2. でbe動詞に本動詞としての機能を認め続けようとするのは、be動詞との融合から発生したと思われる語彙（特に、複合語）の数が少なくない[21]ことを根拠としている。また、「文法化」が進み、be動詞の語彙的な意味と機能（「ある／なる」）が漂白化していたとしても、助動詞will同様、元の意味や機能にたどり着くことができる「痕跡」を未だに残しているからである。

認知的側面から受動構文を捉えなおしてみると、あらためて受動構文に自動詞構文としての機能が少なからず反映していることが確認できた。今後の研究では、コーパスの利用によって言語データの量を増やし、より多くの受動構文に上の二つの主張がどの程度まで適合するかを確認していきたい。その際には、「be動詞＋過去分詞」に加え、「get ＋過去分詞」や「have ＋目的語＋過去分詞／原型不定詞」[22]等の構文自体に反映されている認知プロセスを分析するつもりである。

今回の研究には、日本語文法の研究成果が少なからず影響している。英語以外の言語の研究成果を英語の研究に導入すると、普段、英語の分析には用いられない視点が導入されることになる。これは英語を言語全体の中に位置づけ、普遍的な共通項を発見する「言語相対論」から学んだ姿勢である。そして、この試みは、言語に優劣をつけるような言語研究が行われ

てきた過去の過ちに学び、言語を限りなく客観的に捉えていく手段として有効なものであると信じる。

最後に今回の研究が受動構文の有徴性を焦点化したため、認知言語学の議論が二分法を前提としていると感じられたらそれは誤解である。我々は、経験的に、認知の対象との接し方を増やし続け、そこに意味づけをしていく。従って、能動文／受動構文の対立以外にも表現形式（統語構造）は存在する。主体的に焦点化されたものに有徴性は見い出しても、無徴の対象は意識レベルで感知しているのである。それは、有徴性に＋、無徴性に±をマークすることに平行している。

理論言語学的な考察というものは、常に、誰にも「開かれた」ものであるべきなので、さまざまな方面からのご意見、ご指摘、そして、建設的な見地からのご批判が頂ければ幸いである。

注

1）学習者が受動構文の機能を正しく理解していく過程において、この教授法は必要以上の負荷をかけている。恐らく、学習者が後に学ぶこととなる「完了相の構文」にも過去分詞が用いられているためにこうした指導が続けられているのであろうが、それが全体的な理解の妨げになるのであれば本末転倒である。

2）こうした状況では、受動構文と能動文とが異なる認知過程を経て読み取られた事態認知の言語化であり、従って、それぞれが異なる意味を表しているということを理解できないのが当然である。

3）これは、言語のすべてのレベルに渡る構造のことであり、文の構造から語や音の構造まですべてを含む。人間が認知するすべての事象・現象に「一対一対応」する構造の数は、言語の経済性という点で現実離れしていると考えられた。

4）Poverty of stimulus：生まれたばかりの子供が正確な文法を習得する以前に与えられる情報は、通常、必要とされるものとは比べられないほど質・量ともに貧しいものである。

5）構造主義的な発想から、有限個の法則が上位の構造として存在しているということを意味する。

6）受動構文は、通常、be 動詞を助動詞とする特殊な構文とされてきたが、筆者はそれを典型的な自動詞構文として捉えている。Ⅲ．2「言語類型論的な視点」を参照されたい。

7）厳密には、インドヨーロッパ語族に代表される「主格（nominative）→動作主（agent）：対格（accusative）→被動体（patient）」に対し、能格構造の言語では「能格（ergative）→動作主：主格（subjective）→被動作主」となる。本稿では、便宜上、両者を混同した表記になっている。

8）あくまでも、厳密な意味で「能動態」に分類することには抵抗を感じずにはいられないのだが、この例文における「鍵」が人間の手の中にあり、人間の意志の延長上で機能しているという「読み込み」が構文に反映しているという解釈は可能である。
The door will be opened with this key. という受動構文は成立しても、「by ～」という前置詞句で行為の主体を示すことができない。いずれにせよ、鍵を使ってドアを開ける「行為の主体」の存在が無ければ起こりえない事態なのである。

9）ここで言う典型的な「対」とは、行為の主体（或いは、動作主）からの影響を無抵抗に受けるものとなる。しかし、抵抗の度合いが低ければ、人間も「対」として成立することになる。それを示すため、直後で人間が「対」になっている例を挙げた。機能文法以降、社会言語学の視点から事態に関与する人間の社会的な力関係（power relation）が言語に反映していることが注目さ

れるようになる。

10）その証拠に、*Three hours are taken by it (or, by to go there). は非文である。

11）行為が移動する方向を明確に示しつつ、文構造の順を追って説明している点に注目されたい。

12）前置詞句が行為の方向性を示してはいるが、それが行為の対象に到達しているかどうかは不問に付されている。この現象は他動詞構文にも現れることが次の例文から見て取れる。George shot Paul. /George shot at Paul. この例文では、前文の行為（shot）が行為の対象の「被弾」という結果を招くのに対し、後の例文では行為の対象に拳銃が向けられ、引き金が引かれたことだけを含意している。そのため、発砲された弾丸が行為の対象（Paul）に到達し、その結果として「傷ついた／死んだ」ということまでは保証の限りではない。

13）ここから、文の意味は個々の要素だけで成り立つのでなく、構文そのものにも意味があるということが予測できる。Goldberg (1995) を参照されたい。

14）池上（1984）は、記号論的視点から、人間の言語が「二重分節」というしくみを持つという点で、動物の言語とは異なると指摘している。つまり、人間の場合、通常のコミュニケーションに用いられる文というレベルは句・語に分割され、それぞれは、異なる意味と性質の構成要素が階層を成している。動物の情報媒体には、こうした階層関係を成す意味や構造が見られないということである。(p. 85)

15）この仮説は、音調や言語外のコミュニケーション手段（例えば、「視線」や「身振り」）に含まれる類の「意味」には関与しておらず、文法的手段として言語に反映する主語を取り上げている。

16）本稿は文法範疇としての受動構文と能動文という二種類の分類だけに言及している。しかし、実際にはその中間に位置している構文が認められており、その性質から「中間構文」と名づけられている。この構文は、主に道具や自然現象を文法上の主語（従って、認知プロセスにおける「参照点」）とし、その典型的な属性が引き起こす事態を表す。This key can open the door. という文は「この鍵でドアが開く」、The heavy snow prevented us from arriving there punctually. は「大雪で時間通りに到着できなかった」という意味になる。どちらの例文においても、文法的な主語は主格であって「能格」ではない。また、「（施錠されていた）ドアが開く」、「（我々は）ある状況から遠ざかる」という意味から、文法上の目的語と述語動詞とが自動詞構文における「主語＋述語動詞」のような関係になっていることがわかる。文法上の主語が「能格」ではないことから、他動詞構文でありながら典型的な受動態には変換できないこともわかるであろう。学校文法における「無生物主語の構文」を参照。

17）ある集合体の焦点化によって、語彙レベルでも異なる選択が発生することがある。例えば、その集合体を一括して焦点化すれば all という語が選択され、個々の構成要素がそれぞれに焦点化されると every/each が選択される。

18）Talmy (2001), Chap. 5 (p. 315-6)

19）これは「サピア・ウォーフの仮説」として知られる、文化人類学的な視点で捉えた「言語の相対性」の基盤である。文化と言語の間にある関連性の度合いによって、「強い／弱い」仮説がある。本稿はどちらかと言えば強い仮説を採用している。

20）残念ながら、金谷が日本語の基本文と対立させている英語の「基本 5 文型」についての言及には、非常に大きな過ちがあることを指摘しなければならない。金谷は、英語の基本文の 3/5（Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ文型）が他動詞構文であることを根拠に、英語が行為動詞中心的な類型をもつという判断をしている。しかし、「すべての他動詞構文に同程度の他動性がない」という事実は既に見てきたとおりであり、従って、他動性が極めて低い他動詞構文に「行為性」を求めること事態に無理がある。

21）一例として、become, before, beside を取り上げてみる。それぞれ、「もとは遠くに位置していた

ことが、今は身近なものになっている → そういう状態にある」、「前方に位置する → 時間的前に起こる・空間的前にある」、「横に位置する → 本来の流れの外にある」という意味を十分に読み取ることが可能である。

22）have動詞の「使役構文」が受け身を意味するもの。この構文の研究からは、受け身／使役の対立と、意味の共有関係が明らかにあるであろう。

参考文献

Dixon, R (2002) A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles, OUP, New York

Givon, T（2001）Syntax, vol. 2, John Benjamins, Philadelphia

Goldberg, A（1995）Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure, The University of Chicago Press, Chicago

Halliday, M.A.K（1994）An Introduction to Functional Grammar (2nd edition), Edward Arnold,Sydney

本田　啓（2003）「英語の中間構文」、『月刊言語4月号』、大修館

Huddleston, et. al (ed.)（2002）The Cambridge Grammar of the English language, CUP, Cambridge

池上義彦（1984）「記号論への招待」、岩波新書

池上嘉彦（1991）「英文法を考える－文法とコミュニケーションの間」、ちくまライブラリー

池上義彦（1992）「詩学と文化記号論」、講談社学術文庫

川村　大（2003）「受身文の学説史から」、『月刊言語4月号』、大修館

金谷武洋（2003）『日本語文法の謎を解く－「ある」日本語と「する」英語』、ちくま新書、筑摩書房

岸本秀樹（2003）『「ある」「いる」の交替現象』、『月刊言語11月号』、大修館

Langacker, R（1987）Foundation of Cognitive Grammar, vol. 1, Theoretical Prerequisites, Stanford University Press, California

Langacker, R（2000）Grammar and Conceptualization, Mouton de Gruyer, New York

Lee, D（2001）Cognitive Linguistics: An Introduction, OUP, UK

尾上圭介（2003）「ラレル文の多義性と主語」、『月刊言語4月号』、大修館

坂原　茂（2003）「ヴォイス現象の概観」、『月刊言語4月号』、大修館

竹沢幸一（2003）『「ある」と have/be の統語論』、『月刊言語11月号』、大修館

Talmy, L (2000) Toward a Cognitive Semantics (vol. II), Typology and Process in Concept Structure, The MIT Press, Massachusetts

Talmy, L（2001）Toward a Cognitive Semantics (vol. I), Concepts Structure System, The MIT Press, Massachusetts

田中春美他編（1988）現代言語学辞典、成美堂

Taylor, J（2002）Cognitive Grammar, OUP, New York

坪井栄治郎 (2003)「他影性と他動性」、『月刊言語4月号』、大修館

山口　巌（2003）『「もつ」の言語・「ある」の言語』、『月刊言語11月号』、大修館

鷲尾龍一（2003）「もつ・ある・なる－助動詞の体系と非対格性」、『月刊言語11月号』、大修館